
IS 月垣 水月の視点

ネコ削ぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 月垣 水月の視点

【Nコード】

N3776S

【作者名】

ネコ削ぎ

【あらすじ】

当てるのが得意な少女のお話。

視点1（前書き）

とりあえず...という

視点1

一回目はがっかりで

二回目は全然で

三回目はおかしくて

四回目はイカれてて

五回目は優しくて

六回目は強いだけ

それから次も届かない。気がついたら十六回目。

ハッピーバースデー！！

世界が変わったのは何時だったか。

かつて、国家の矛としてまたは盾として長い年月をかけて発展し、存在してきた兵器はたった1人の天才に造られたモノによって舞台から引きずり降ろされた。最強を誇った核兵器さえも無価値なモノに成り下がってしまった。

ISと呼ばれるパワード・スーツが最強の兵器として新たに君臨した。

勿論、問題を抱えていた。数に限りが存在する事と女性にしか扱えないことである。

この事によって女性の社会的地位が急激に上がっていった。

これが悪いかどうかを言えば、最悪になるかも知れない。今、社会では男性を奴隷や小間使いのように扱う女性が見られるようになってきた。もし、男性にISを使える者が現れたら、女性達の今まで行ってきた仕打ちによっては戦前より酷い立場になってしまう。

まあ…男性でISを使える者が出てきましたが。テレビでやってましたしね。

だからこのIS学園の1年1組において、私、つきがき月垣 みずき水月が知らないクラスメイトの中で織斑一夏を見つけたのは運命でしょうか?…なんてね

にしてもミスター織斑は大変だね。女性の園に1人投げ込まれて、いやあ、同情出来ませんなあ…私、女の子だもん。

…寒気がしたゾツとした。だもんはないかな、だもんは。教卓に立っている山田先生なる人が何か喋っているが誰も、勿論私もだけど聞いていない。理由は簡単、珍獣?織斑一夏を観察しているからだ。

因みに私は窓側の一番後ろの席なので織斑一夏を見続けている彼女等を見回すことが出来る。

暇になってきた。

誰も彼もが1人の人物に注目しているせいかな、何にもやることがない。

…とりあえず、ぼーっとしてますか。

「「「キヤーーー」」」

ハハハ……うるせえ〜っす。

何があったのかと、ぼーっとする意識を覚醒させると、ぱぁーんと清々しいほどの音が響く。ハジキかな？

教卓に新たな人物が立っているではないか。

黒いスーツを身に纏うその人の顔を見た時、どうしようもなく思っ
てしまった。私はあの人を知っている。面と向かって会ったことが
ないのに。彼女は「ブリュンヒルデ」の名を冠するISS大会の初代
王者だと知っている。織斑 千冬。何故、解るのか？

…テレビ観てました〜。

気付いたら私の前の人が自己紹介を終えたらしい。

サツと席を立つ。

「どうも、月垣 水月です。名前の最初と最後に月が付きます。だ
からなんだってことはないんですけど。とりあえず、当てる事が得
意です。…くじ引きとか。まあ、運動も好きなんですよ。参りまし
たか？参りませんよね。…織斑教諭、その手にある出席簿を振り上
げないで下さい。真面目にやらせていただきます。改めて自己紹介
します。名前は月垣 水月です。得意なことは本当に当てる事で、
嫌いなことは棒状のものを振り回す事です。お願いします」
「ヤッター！！頑張れた私。」

織斑教諭も分かってくれたのか去ってくれました。

兎に角、私達は織斑教諭に年単位でシバかれるらしい。

授業なんて中学以来だね。

山田教諭の授業中に私は思った。

内容は頭に入っているからノート録ってれば良いのですよ!!

気になることがあるですよ。前の方にいるミスター織斑が挙動不審ですよ。…何してんの？

「殆んど、分かりません」

山田教諭が「何か分からないことありますか」と聞いてきたら、織斑一夏が衝撃的な発言をした。

オマエ…学校なめてんの？

織斑教諭が参考書に目を通したか聞いたら、古い電話帳と間違えて捨てたと答えた。

オマエの捨てた電話帳はボロボロだったのか？ホコリ被っていたのか？

織斑が織斑に叩かれた。分かりやすく言うと織斑一夏が織斑教諭に出席簿アタックを食らった。痛そう。

休み時間になりました。なので寝ます。

私は瞬時に机にぐてーっとへばりついた。

ううう、ひんやりする。

うつすらとした意識の中、男女の言い争う声が聞こえる。

ISがどうとか、ラッキーだなんだうるっさいなあ。

刹那、意識が覚醒した。何があつたか分からない。まだ寝足りないところでの強制覚醒。

面を上げると織斑教諭がド正面にいた。手には出席簿がある。

「クラス代表を決める時になにを寝ている」

「気付いたら寝ていました」

バン！！

「気がついてもつかなくても寝るな」

難しいですけど…頑張ります。

クラス代表は自他推薦で挙げられた者に拒否権が無い。

クラスの女子達が織斑一夏を推薦し始めた。なんとなく分かる。だけど、世の中上手くいかないのだろう。

金髪頭が異議を唱えた。

「クラス代表はトップが成るもの。このセシリア・オルコットしかいませんわ」

じゃあ…成ればいいと思うよ。

私のツッコミが聞こえるはずもなく、次々と言葉を並び立てる。

織斑一夏も負けじと反論する。売り言葉に買い言葉。

結果、鶴の一声と言うのだろう。織斑教諭の妥協案みたいので1週間後にISで決めるようだね。

拳で語らうってやつね。

IS学園においての私の部屋は1人だ。同居人がいない。おかげで自分色に染め放題。
早速、行動に移す。
部屋の壁にダーツ用の的を取り付ける、終わり。
なんてことはない。

少しずつではあるが外が騒がしくなってきた。

このままでは気になって寝れなくなるので、ぼーっとする頭で部屋の外へと踏み出す。

成る程そういう事ね。

廊下には人、人、人がごった返していた。

騒ぎの原因は必死になって扉を叩いているミスター織斑。：同居人に閉め出されたかね？

ある意味周りは敵だらけの中、織斑一夏は追い詰められている。沢山の異性に囲まれていたらやだね。

途方に暮れる織斑一夏は辺りを世話しなく見渡すと、何か見つけたのか、物凄い勢いで「此方」に走ってきた。

嫌な予感がする。

私は当てるのが得意でこういう予感は外したことはない。

踵を返し、急いで戦術的撤退をしようとしたが、織斑一夏の方が一瞬速く、部屋に侵入されてしまった。
仕方なく、急いで鍵をかけた。

「悪い、助かった」

織斑一夏がホツとしたように言ってきた。

「はあく、構いませんよ」

とてもどうでも良くなってきました。

「えーっと、月垣さんだっけ」

「オフコースだよ」

親指を立てて笑顔で答えてみる。

その行動に緊張が和らいだらしい。

「それで、ミスター織斑こと織斑一夏は、一体全体どうしたと言っ
のだね」

「いやあ、同居人が筈でさ。追い出されたんだ」

「そいつは災難。まあでも、ほとぼりがさめるまで此処でも何処で
も好きな所に居るといいさ」

この言葉の数分後、彼は同居人の篠ノ乃 筈に連れていかれた。御
愁傷様。

首筋にかかる青色の髪を弄くりながら、まあ、いいかと思った。

織斑一夏と話が出来たんなしね、問題無い。

ベッドに横たわり、眠ろうとした時、意味もなく、発してみた。

今回も私は元気ですよ。

視点2（前書き）

なにこれ

視点2

くだらないくだらない。力も想いも無いのに、よく舞台上上がったよ。

監督、もっと良いのいないんですか？

ガバツと目覚めた。

急いで辺りを見渡す。

装飾品が少なく頓着してないことが伺い知れる部屋。唯一あるダーツのセットが目立っている。

自分の部屋だ。

「Dreamか」

私が所属している劇団で演技の下手な団員が何故か現場監督にこたま殴られる夢を見た。
うっん、ファンタジー！

IS学園の制服に着替えて朝食へと出発する。勿論、鍵をかけてからですが。

道中、ミスター織斑こと織斑一夏と篠ノ乃箒に出くわした。

「どつたの？」

とりあえず、先制パンチ…言葉だけだね。

「よう、水月。箒と朝飯に行くんだけど、一緒に行こうぜ」

ソワ…!

急に負のオーラが溢れだした…主に箒から。

あまりに禍々しいので鳥肌がたつてしまいましたねえ。

これは…私、お邪魔ムシつてやつですか監督？

ミス箒はぜつてーホレていますぜい、ミスター織斑。私は空気の読める女。こんな場面でのベターな答えは知っている。ベストにはあらず。

「よっしやー、行くよ。有り難くね」

明らかに篠ノ乃 箒の機嫌が悪くなる。

ゴメンね。私、友情とか気にしないから。貴女が友情を感じているかは知らないし。幼馴染みが何時までも一緒に居られると思うな。いつ知らない奴が割ってはいるかも分からないのだ。社会べんきよーだよ、ミス箒。

食堂で暢気にざるそばをちゅるちゅるすすっている。目の前でシンシンしている箒がいるのを知っていながら。

「それだけで足りるのか、水月」

「ナメんな。私が燃費が良いの…知ってるだろ!!」

「いや、知らないし」

「でしようね」

他愛ないやり取り。一夏のお隣さんが私を睨み付けるのを止めていただければ、真に他愛ないやり取りになるね。そんな中ざるそばを完食したので、ダッシュで逃げる。

こんな雰囲気です。常識人は飯など食べぬわ。

授業中は相変わらず、一夏は理解出来ないようだね。うーん、ファイト。かくゆう私は解ります。簡単だね。私…当てるの得意ですから。

このIS学園には様々な生徒がいる。

例えば、私の目の前にいる二年生。何処かの場所で。見た目が不良少女です。あからさまではないが。ちなみに3人ほど。タバコを吹

かしています。

「とりあえず、財布の中身全部な」

リーダー格がそんなことをほざきました。

此処は日本だ、アメリカじゃない。アメリカなジョークは求めてはいないね。

はあく。こいつら完全に油断している。私に数の暴力は効かないというのに。

何か武器になるものを気付かれない様を探す。

タイミングを見計らって…逃げる！！

「あ、待て！！」

3人組が後ろから迫ってくるが、相手が悪かった。今の私は地を駆けるガゼル。追い付くことは出来まい。

数分後、見事に捕まり、ボコボコにされました。

「ていう夢を見た」

昼食に焼きそばを食べながら先程授業中に起こった出来事を話した。

「寝るなよ」

呆れた様に、一夏が言う。
おっしゃる通り。

「いやねえ、眠いじゃん」

一夏はさらに呆れてしまった。

「オレはまだ授業についていくけてないのに」

はは…知らね。

「そういえば、オルコットとの試合は大丈夫かねえ」

「一夏には私がついているから、水月は無関係ない」

はい？

んん、なぐにを言ってるのかねえ？

「箒、教えてくれるのか」

2人の間で何かやり取りが有ったのでしょうか。

どうでも良いですけど、箒って一夏が絡むとめんどくさい。焼きそ

ばを食べるのを再開する。

試合当日。

私は周りに混じって、観客席に座っている。

フィールドにはセシリア・オルコットと織斑　一夏がISを展開して向かい合っている。

青いISは二メートルくらいの銃を構えている。

「ブルーティアーズ」、蒼い雫を意味するIS。蒼い雫か。いくら蒼く存在している雫も地面に堕ちれば、ただの水でしかない。土に吸収され、感動もなく消えていく。

イギリスがどの様な意味でブルーティアーズと名付けたかは知らないが、私には意味も与えられない一滴の水でしかない。

セシリア・オルコット。貴女はいつか堕ちるだろう。そして、消えていく。

織斑　一夏に目を向ける。純白のISを纏っている。名前は分からないが、彼の為だけに用意されたのだろう。気持ち悪いくらい白く油断したら直ぐにくすんでしまいそうだ。

気をつける織斑　一夏。おまえの力は汚れやすく、維持するのは難しい。

2人はなにかを話した後、闘いを始めた。経験の差だろうか。一夏が押されている。

一夏の負けだね。

これ以上の長居は無用なので、会場を去った。

結果だけ言います。負けました、織斑 一夏は。

現実だね。

後日、ミスター織斑が我がクラスの代表に就任した。よかったね、ケケケ!!。

「わたくしは辞退させて頂きました。一夏さんに譲ることにしましたわ。IS操縦には実戦が一番になりますし」

ああ、そう。頬を赤く染めて言うということは、堕ちましたか。くだらねえ、寝よ寝よ。

パン!!

「寝るとはいい度胸だな、月垣」

織斑教諭、痛いつす。

叩かれた頭をさする。

「申し訳ありません。次からは謙虚に寝させて頂きます」

バン！！

痛過ぎるぜ、織斑教諭。

視点3 (前書き)

とりあえず

視点3

「ねえねえ、転校生の噂聞いた？」

ぼんやりとした意識の中、まだ名前を覚えていないクラスメイトの
声がある。

「中国の代表候補生なんだって」

「今更ながらわたくしを危ぶんだでのことでしょうか」

セシリアが何故か自慢気な声だ。素人の一夏に圧されたと聞いたん
ですけど。

あゝあ、私にもIS来ないかな。……やっぱいいや、要らないし。
国のしがらみに巻き込まれたくないから。そういう意味では、ミス
ター織斑は大変だね。初の男性でISを使えるんだ。本来なら研究
所に連れて行かれて実験三昧。そうならないのは、織斑 千冬の存
在が大きいだろう。まだ何かの存在があるかもしれないが。

「その情報もう古いよ」

いやいや、一夏のことに関してはまだ新しい事だけど。
知らない声だけど、このクラスの人じゃないね。

「鈴…おまえ鈴か？」

どうやら一夏の知り合いらしい。女の子ばかりだね。

「そう、中国代表候補生鳳 鈴音。今日は宣戦布告ってわけ」

初めまして 鳳 鈴音さん。

机に伏した状態で鈴？に心の中で挨拶する。勿論、顔を見ていない。

「なんだそれ。スゲー似合ってないぞ」

一夏……正直だね。

知り合い同士の再会に興味がない私は寝ることにした。べ、べつに会話に参加出来なくて寂しいんじゃないから！……似合わない自分がいるのに、気づいた。

バン！！

何か乾いた音に反応して脳が覚醒した。誰かが近くにいる気配がしたので、顔をあげる。

……織斑教諭がいる。

「月垣」

ヒイ！？呼ばれた！！

「何度も言っただと思うが、授業の始まる前から寝るな。日本語は通じているよな」

ドスのきいた声とはこのことか。クラスの誰もが黙りこんでいる。ヤバい…ヤバいやバいやバい…。こうなったら、正直に謝ろう。

「はい、日本の生まれにございます」

バン！！

「反省しろ馬鹿者」

ん、無理。

バキ！！

私の頭から鳴ってはいけない音がして、激痛が走った。…痛いっす。

いつものメンバー、一夏、箒、ミス・イギリスことセシリアと共に
お昼を食べにいく。

「それにしても水月さん。少しは反省したほうがよろしいのでは」

セシリア、ぶり返すの止めてね。蹴るよ。

「恐怖政治には屈しない!」

「いや、そこまで意気込むことか」

「おお、ミスター織斑は解ってませんね」

「ミスター織斑ってオレのことか？」

「オフコース」

嫌じゃ…ないだろう？

一夏の背中をバシバシ叩きながら、歩いていく。セシリアと篝の視線が痛い。

「水月、随分と仲がいいんだな」

篝が私を睨みながら、言ってきた。一夏に近づくなと言ってる気がする。気にならないし気にしないけど。

「遅い！！」

ラーメンを乗せたトレイを持った知らない少女が立っていた。ど・こ・か・で聞いた気がする。…ああ、夢でか。

周りの面子を見るとどうやら知っているようだ。

マジでだれ？

何か嫌な予感がしたから、彼らとは離れて食べよう。そう思って、焼きうどんをもらっていざ逃げようとしたら、一夏に捕まった。

「何処行くんだった水月。あっちの方へいこうぜ」

は、放せ。

そのあとは大変だったヨー。 凰 鈴音と一夏が何かしら大切な約束を

していたが、一夏がそれを忘れるという暴挙を犯し、仲は決裂。や
つてしまったね。

あとはお互いに罵り合い、一夏が禁断の呪文を唱えたせいで、凰
鈴音が怒ってしまった。つまりそーゆーことさ。

クラス代表戦は一組と二組が最初に当たることになった。一夏達は
毎日の様に猛特訓をしてへとへとになっていた。主に一夏が。

たまに、凰 鈴音 私は鈴音すずねと呼んでいるが、鈴音とバツタリ出く
わすと顔を背け、取りつく島もない状態だ。

そんなこんなでクラス代表戦当日。

フィールドではミスター織斑こと織斑一夏と鈴音こと凰 鈴音が睨
み合っていた。ヤンキーか、あんたらは。

試合開始とともに、2人はクロスレンジで戦い始めた。鈴音の持つ
青龍刀が縦横無尽に振るわれ、接近戦を制していた。一夏が距離を
置けば、見えない遠距離兵器で攻撃をうける。つよいね。誰かあ
の兵器の説明をください！。セシリア達の近くに行けばよかったよ。

じり貧の一夏は持ち前のスピードで回避をしている。遠目で視にく
いが、一夏がなにかをしようとしている。

瞬間、2人の距離が限り無くゼロになる。

イグニッション・ブースト。

考えたね。奇襲には丁度いい。ただ、近接戦闘専用装備しかない白
式を考えるとそれしかない。相手によつてはカウンターで切りふせ
られる。

一夏が必殺の一をかまそうとしたとき、会場に衝撃が起こった。

視点4（前書き）

飛び飛びスカスカ中身無し

視点4

この前は大変だった：周りが。

謎の無人ISが会場に現れたのだ。まあ、専用機持ちの前に破れた。今は山田教諭が新しく来た生徒の紹介をしている。1人はシャルロツト・デュノア。金髪で他の女子曰く、守ってあげたくなる男の子らしい。：じゃあ守ってあげれば、命を懸けて。

もう1人は白髪で眼帯をした少女で挨拶は織斑教諭に言われてから、簡素に済ませた。社会を舐めてんのかキサマ。怖いんだよ、愛想悪いとすぐに切り捨てられるんだよ！！まあ、実際は知らないけどね。件の少女、ラウラ・ボーデヴィツヒは一夏の前まで来て、拳を振るった。……何しているんだね。

一夏を守る為かセシリアと箒が2人の間に入る。

一夏：…いつの間にそんな弱くなったの？そもそも強かったの？

ミス・ボーデヴィツヒは空気を悪くしても悪びれることはなかった。

何日かすぎて、私はピンチに陥っていた。

目の前にラウラ・ボーデヴィツヒが立っていた。

私が何をしたって言うのよ。：本当に何かしたかな私？

「学年別トーナメント、私と組め」

私が？何で？

「いいぜえ。私で良いなら」

とりあえず、組んでみよう。だが後悔するなよ、ラウラ・ボーデヴィツヒ。私は、弱いぞ！！

ISスーツを着た私は、ただ空を見つめていた。展開されたIS『打鉄』が此処が戦場であることを無理矢理理解させてくれる。『打鉄』がこの場所が戦場だということを無理矢理にも理解させてくれる。隣を向けば『シユバルツェア・レーゲン』を展開したミス・ボーデヴィツヒがいる。目の前の敵をどうしようか考える。右手に握られたマシンガンが唸るぜ。

「……………はは……………はあ」

現実逃避の笑いと現実を理解してしまったため息。

試合の開始と共に、敵に突っ込む。

「勝負勝負勝負勝負」。勝ち負けが一杯だね」

軽口をたたいているが、精一杯逃げ回っている。ラウラが敵を倒すその日まで。他力本願ってやつだ!!

一回戦は主に…全てラウラによって勝利した。

とても心が痛い。

二回戦はミスター織斑とナイト・デュノアのペアだ。

一夏とラウラは険悪なムードで睨み合っていた。

これは援護が期待出来ないな。

「シャルロット、手加減してください」

「えっと…無理かな月垣さん」

ですよね。

試合が始まると私は弾をばらまきながら、後退した。いいもんね、どうせ弱虫ですよ。

私の心情を察してくれたのか、シャルロットは一夏の援護に行ってくれた。私もラウラの援護に向かう。ラウラに斬りかかる一夏に対して、マシンガンを向け、弾をばらまく。

「邪魔をするな!!」

怒られました。助けようとしたのに…。

シユンとなつてしているとシャルロットの攻撃を受けてシールドのエネルギーがガリガリ削られる。

何かどうでもいいや。

手に持った武器を捨て、攻撃の意思が無いことをアピールする。

一対一の戦いでは押ししていたラウラも2人が相手では勝てないようだ。

敗色の濃いラウラに変化が起きた。ISが身体を包みこみ、全身装甲のISとなった。

周りが騒がしくなり、ラウラの変化がよくないモノだと解った。

「ラウラ!！」

近くに寄って呼びかける。それが悪かったのだらう。ラウラが腕を振るうと、私の足が熱く感じる。そこに目を向けると、右足に縦に切り傷がついていた。傷を認識すると痛みが広がっていき、頭がそれで一杯になる。

気がついたら、地面が迫っていた。

嘘!?

意識を手放してしまった。

視点 終（前書き）

無理矢理感が物凄い。やっぱり原作見なきゃ駄目ですね。

視点 終

嬉しい嬉しい臨海学校。早く着かないかな。まあ、着かなくていいんですけどね。…足を怪我して海なんて入れないし。

学年別トーナメントでラウラに撃墜されてから何日か過ぎた。意識が戻るまで数日かかり、全治するまで、物凄く早くて二ヶ月はかかるとのこと。臨海学校には見事に間に合いませんでした。

皆が水着姿で砂浜を駆けていくのを松葉杖を突きながら、見送る。

…悲しすぎるよ、マジで。

このまま此処に居ても、悲しみが去らないので、旅館まで歩いていく。

旅館に着くと一目散に自分の部屋に行く。部屋に荷物の一部を置き、一息つく。

荷物検査がないのは助かりました。

他のクラスメイトの部屋を順繰りに周り、ストライプの包みに包まれた小さな箱を見つからない所に隠す。

「2日後の夜にお楽しみ」

隠しながら、楽しくなり眩いてしまう。

全部の部屋に仕掛け終わると、眠くなったので自分の部屋に戻る。

1日目の夜、美味しい海の幸を頂く。美味いっす。

同じテーブルに座る皆も美味しそうに食べている。

「水月ちゃんも大変だよな。その怪我無ければ一緒に遊べたのにね」

クラスの人達が声をかけてくれる。

「まあ、明日の訓練を休めるから構わないぜえ」

大事なことだ、休めることは。

2日目、私を除く全員がISスーツを着て、訓練を始めようとしていた。

手持ちぶさたになった私はクラスメイトを眺めた。

好きな男の前では素直に慣れない筱ノ乃 篝。

最初は見下していたが、男の真剣さに、恋したセシリア・オルコット。

男の子だと思っていたが、実は女の子で、自分を受け止めてくれた男が好きなシャルロット・デュノア。

尊敬する者に泥を塗ったと嫌ったが、男に救われたラウラ・ボーデ
ウィツヒ。

…… ああ、あと凰 鈴音。

この世界の全てにおいて、渦中の人物、織斑 一夏。

私は君達の仲には入れないな…足怪我してるからね。

考え事していると、織斑教諭が何かを叫び、皆旅館に戻っていく。

訳が分からないが一応皆に従って戻る。
……やることないから、寝よう。

夜、部屋から抜け出して砂浜に行く。右足に付いているギブスを無理矢理外す。後で医者に怒られる。…後があればね。
砂浜で跳びはね、足の動作を確認する。大事な告白に足グキってのはないからね。

色々肉体の動作確認をしていると、一夏が此方に向かってきた。

「水月、手紙なんか出して何か用か？」

何の用だと思う？

一夏の顔を見ると嬉しく思う。待ち焦がれたこの瞬間、様々な言葉を囁きたいが、ちゃんと言葉にしなきゃいけない。

「おめでとう、織斑 一夏君!!」

「は？」

「一夏君、君は神を信じるかな」

状況が理解出来てない、そんな顔をしているね、一夏君。大丈夫、理解なんて求めてない。

「な、何を言ってるんだ」

「聞いたままの意味だよ。神は信じるかな？」

宗教の勧誘だと思うかな。

「実は、君と知り合っただのは今回で十六回目になるんだよ。意味…分かるかな。分かる訳がないよね」

何を言えば、どう喋れば良いか分からない。今の一夏は私の発する奇っ怪な言葉についていけてない。

「旅館の方を見てみなよ」

ゆっくりとした動作で旅館を指さす。

一夏もその方向に顔を向ける。

瞬間、旅館のあちこちで爆発が起こる。

「な!？」

驚愕、まさしくその一言だ。

「凄いでしょ、あの爆発。私が1人でやったんだ」

笑いが込み上げてくる。

「何でこんなことを!!」

「何で?これから話すことに邪魔が入らない為だよ」

邪魔が入らない為に殺す。筋の通らない、身勝手な行い。しかし、此処では違う。

「では、話そう」

一夏が私を睨み付けてくる。当たり前かな。知り合い、友達、大好きな千冬ねえを殺したんだ。ISで斬りかからないだけましか。

「この世界は神によって創られた。世界の人々、動物は神によって創られた。何故創られたのか?簡単です、実験の為です。様々な生物を様々な遺伝子配列、環境で創り、どの様に進化、絶滅していくかを調べる為です。優秀な因子は次なる実験場に移され、更に優秀

な因子に別けられていく。神が何故実験を始めたかは解りません。ただ永遠の時間を持つ神を人々が理解するのは不可能です」

私の声と波の音、一夏の息づかいしか聴こえない。

「神はある実験をしました。1人の人間を置き、周りの人間だけを変え、神の定めた基準を満たす力を備えた人物になるのか。選ばれた人間は織斑 一夏と名付けられた。つまり君だ。それから君の近くに私が派遣された。何度も立ち位置を変え十六回も君に出会った。

一回目はただのクラスメイト。不干涉でただ君を見てるだけ。君はがっかりするくらい弱かった。

二回目は親戚。全然駄目だった。

五回目はもう1人の姉。君は優しくなったけど、それだけだった。

六回目はライバル。互いに競いあったが、君は力以外を捨ててしまった。

前回は千冬とISの大会で争ったライバル。君はそれなりに強くなつたが、少し足りなかった」

少し間を空ける。時間はまだまだある。

「今回、君は神の定める基準を越えられるかな」

「意味がわからねえぞ水月」

「分かりやすく言えば、私と戦えと言うわけだ。君が満たすことが出来れば皆生き返る。彼らはやり直しを約束されているからね。君が満たない場合。残念だけどやり直した。また彼らは死ぬことになる」

「オレが勝てばいいんだな」

やる気になったらしい。

服を脱ぎISスーツになる。手紙に書いた様に中に着てきてくれましたか。

白式を展開する。

「始めましょうか」

ズボンのポケットから銃のグリップを取り出す。

展開して、体に装着され、全身装甲のISになる。ダークブルーの装甲で背部に2つスラスタユニットがあり、それとは別に4つの棺桶に似たユニットが浮いている。両手にはマシンガンを装備している。

「さて、君は私の『撃鉄』を落とせるかな」

両手のマシンガンを放ちながら空へと舞う。一夏も追いかけてくる。肩部のミサイルポットを次々展開し、逃げ道を塞ぎ、左手をレールガンに変更して撃ち込む。左肩の装甲を吹き飛ばす。一夏のバランスが崩れたところで残りのミサイルポットを放つ。

一夏はイグニッションブーストで距離を詰め、雪片二型を振るう。

瞬時にスラスタを吹かし、刀を振り切る方向に回避する。

左をショットガン、右をマシンガンに換えて、撃つ。背中から第三、第四の腕が伸び、バズーカ二挺を構え放つ。

攻防は激化し、お互いに時間も場所も忘れ、戦った。

しかし、最後に立っていたのは私だった。撃鉄の三、四の腕は破損して、銃器の残弾は僅か。

「強くなりましたね。でも私、当てるのが得意だから」

私を中心に世界が崩壊していく。次に進むか、やり直すかは分からない。

私は眠りについた。

オレ、織斑　一夏は非常に気まずい雰囲気だ。クラスの全員が女子地獄だ。

山田先生が挨拶するが、誰も聞いていない。

どうすればと考えていると、山田先生が名前を呼んでくる。自己紹介の番が回ってきたらしい。必死に挨拶をするが、周りからもっと何かないのかと言われる。無理だ。

そう思っていると、教室の扉が開きスーツを着た青色の髪の女性が入ってくる。

「おっはよう皆さん。私がこのクラスを担当する1人の月垣　水月です」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3776s/>

IS月垣 水月の視点

2011年7月24日09時15分発行